

# おと坪のた回街 奈良

荒井敦子



## 第六回

永六輔さんと「いのち」——私の人生の師匠

悲しみを乗り越えるとき、そこにはいつも永六輔さんの「いのち」の教えがあった。

永さんは、私に「いのち」の本質を教えてくださいました。「人は二度亡くなる」という言葉で。

一度目は、心拍の停止。お医者さまの「臨終です」の宣告によって。

二度目は、人に思い出してもらえなくなったとき。

永さんの歌に「いのち」が満ち溢れているのは、たくさんのお別れがあったからだろう。愛する人との悲しいお別れも。

ある夜、永さんはTBSテレビの筑紫哲也さんのニュース番組に出演されていた。筑紫さんから当時ベストセラーになった『大往生』の意味を聞かれ、「大往生とは晩年を含めた言葉というより、まさにその『旅立つ瞬間』をいうのではない



でしょうか」と、意外な返事された。そして何より、生放送でのお顔が、いつもの永さんではなかった。永さんの体調が心配になって、翌朝マネージャーさんにお伺いすると「ご自身のお身体は、問題ありません」と、その後の言葉を濁された。数日後新聞で、その夜が、奥様（昌子夫人）とのお別れのときだったと知った。

＋＋＋＋＋

長らく、永さんの生活は旅で明け暮れていた。土曜日の朝のラジオ生放送が終わると、全国の旅に出て、金曜日の夜にご自宅

あらい あつこ  
奈良県大和郡山市生まれ。声楽家。日本音楽療法学会認定音楽療法士・監事。NPO法人音楽の森理事長。大阪音楽大学声楽科卒業後、放送・教育方面の職歴、難民キャンプや障がい者施設でのボランティア経験を生かし多彩な音楽活動を展開。まっぼっくり少年少女合唱団を結成し世界の都市での公演や合唱指導を通じた国際交流、また県下のわらべ歌採譜に尽力し、町と村の交流に努めている。1993年「サントリー地域文化賞」受賞。共著に『歌の力』（永六輔、荒井敦子著PHP研究所）。その他、創作ミュージカルや校歌等の作詞作曲作品多数。コロナ禍では、「森への贈り物」として寺社への音楽奉納を行い、2021年「ARTS for the future！」事業に採択された。

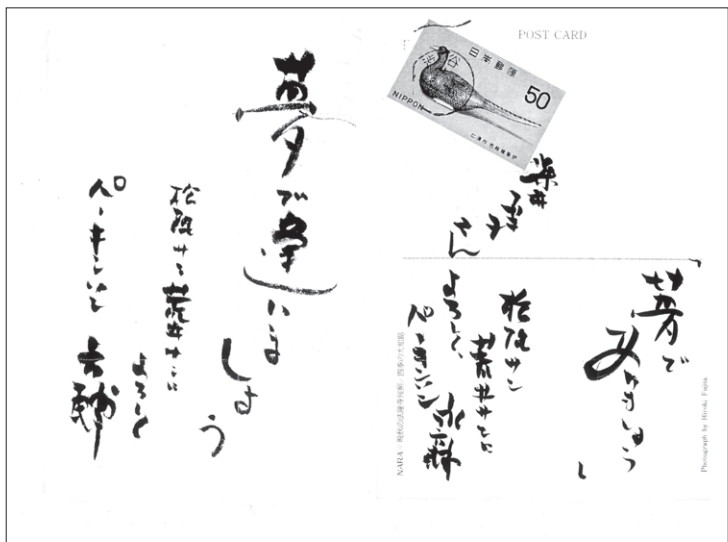
(題字) 荒井敦子 協力：笹川文林堂 奈良市三条角振町

に戻り、一泊だけして翌朝のラジオ放送……。何十年もこれが繰り返された。永さんが奈良に来られたとき、私の携帯電話をお貸しすると、決まって事務所に連絡を入れておられた。「今、奈良に着きました。これから本番です」という短い報告。その相手が昌子夫人だったと知ったのは、ずっと後のことだ。おそらく、永さんは旅先のことからも同じように、「今……です」という言葉を、送り続けておられたのだろう。奥様はその言葉を頼りに、永さんの週に一度の帰宅を待ち、全国各地での永さんの活躍と健康を祈り続けておられたのだろう。

一度だけ、奥様にお会いしたことがある。私が音声館の館長時代、思いがけず、ご夫婦でお越しいただいたことがあった。とても美しく上品で、小粋で小柄な、ため息が出るくらい素敵な女性でいらした。永さんは敬語を使って奥様に話されていたと思う。奥様も丁寧な言葉でお話しになっていた。週に一度しか会えない中で、かえってお互いの信頼や尊敬が高まっているご様子にドキドキするような憧れを懐いた。永さんは奥様に「こちらが荒井敦子さん。そう、僕がいつも言っている『あつこちゃん』です」と紹介された。

奥様が他界されて数年たった2001年、永さんは『妻の大往生』を出版された。舞台では「夫に先立たれた女性は長生きするけど、妻に先立たれた男の寿命は、短いんですよ。僕は今も元気ですけど」と、悲しみを明るい言葉で書き換えられて会場は拍手に包まれていた。

それからまた何年か経って、パーキンソン病という難病が、永さんに取り憑いた。ご自身は「僕はパーキンソンのキーパーソンです」と劇的に自己紹介されていたが、病状の進行で車椅子の生活になられてからは、東京を離れることが難しくなった。それでも、ラジオの生放送だけは、休むことなく続けられた。日進月歩の薬のお陰もあっただろうが、何より周囲の人々の支えが大きかった。言葉が少々聴き取りづらくなっても、共演のアナウンサーさんやアシスタントの方々が的確に永さんを



永六輔さんから届いたおはがき。

フオローし、ラジオにおける永さんの存在感は、最後まで色あせることがなかった。

永さんのご実家は浄土真宗のお寺で、永さんは仏教の教義にも精通されていた。永さんは般若心経の「空の心」を「ドーナツの穴」に喩えて話された。ドーナツの真ん中の穴が目立つのは、周囲にドーナツがあるからだ、「周囲」が消えれば、あれほど目立っていた「中心」も消えてしまう、と。きつと永さんは、中心は周囲のおかげで存在できている。どれほど世間に知られる身となるうが、マスコミで売れようが、これだけは忘れてはならない。と、私たちに伝えたかったのである。だからこの言葉は、私の心に深く刻み込まれている。

中心だけで仕事はできない。ラジオ放送での永さんを中心とする周囲の協力体制。これこそ、永さんから『空の心』として、教えていただいたお話、そのままの姿だった。

ラジオの放送だから、もとより永さんの姿は見えない。声だけが「いのち」の世界だが、かりに声が出なくなっても、永さんの存在は消えなかった。周囲の人々の語る内容や語り方が、中心にいる永さんを浮かび上がらせていたのだ。

このとき、「人は二度亡くなる」という永さんの言葉が、重い言葉として甦った。二度目の死は、人に思い出ししてもらえなくなったとき。医学的な死を超えた、その人の存在が「亡くなる」ということ。「いのち」とは、そういうものであったのかと、視えないラジオの向こうの、そのとき既に聴き取りづらくなっていた言葉の先の、永さんと永さんを取り巻く人たちの

永さんに舞台に出ていただいた。43年前、初めて共演させていただいた思い出の地、我が故郷の大和郡山市やまと郡山城ホールである。2014年は、市制60周年記念コンサートにお越しいただいたのだ。このときは昨年のお二人に加えて、きたやまおさむさん、さとう宗幸さん、池宮正信さんにも加わっていただいた。ほとんどが以前に永さん直々のご紹介の方々だ。私と同じ年の故郷で、師匠の永さんのお力をかりて、故郷をお祝いできた喜びと感謝は、語り尽くせない。上田清市長の深い御理解あつてのこと、本当に有難いことである。

この日の永さんは、出番が終わっても楽屋に戻らず、下手の袖でゲストやまっぼつくり、音楽の森合唱団の舞台をずっとご覧になっていた。ご自身が舞台という「中心」を支える「周り」の役割をされているかのように。誰もが胸を熱くし、身をひきしめた。そのとき音楽の森が歌った「南無観」、この東大寺二月堂のお水取りでの声明をモチーフした私のオリジナル曲をとても気に入ってくださり、後にラジオで大絶賛の上、全国に流していただいた。そのことがあって、以後の私の作曲活動には拍車がかかり、声明から曲をつくる喜びを一層強く感じるようになった。奈良のメロディを世に出す勇氣と自信は、永さんからいただいた。永さんは奈良のメロディにも「いのち」を与えてくださったのだ。

東京を離れて、奈良の舞台に立つ。当時の永さんにとって、この命がけに近い行為が、永さんを敬愛する著名人を大和郡山の地に集結させた原動力となり、夢のようなコンサートは大成功裏に終わった。

姿に、教えていただいた。

永さんの考え方は、行動にも現れていた。自分を待つものもとには、何があつても駆けつけようと努められた。

2012年の3月、まっぼつくり30周年記念コンサートに出演していただいた。日帰りで強行された奈良旅行だった。マネージャーの永良明さんが「病気が進行してきて、東京を離れたのは、この荒井さんのところだけですよ」とポツリともらされた。こちらは言葉を失った。

舞台の上では、出演者である高石ともやさんや道上洋三さんが永さんの車椅子を押してくださったっていた。最後のアンコール曲は、これぞ国民的（ヘビローテーション、『上を向いて歩こう』）。

歌が終わり、緞帳が下がり切るまでの10数秒というところで、突然、永さんは車椅子から立ち上がろうとされた。全力を振り絞ったせいで、物凄い形相となった永さんは、あたかも「みなさん、これからも『あっこちゃん』を応援してあげてください。よろしく」と言わんばかりに、強い目力で客席を見回された。嵐のような拍手が沸き起こった。永さんの横にいた私は号泣し続けた。

翌2013年7月にも、さらにその翌年2014年8月にも

だが、その舞台が永さんと共演させていただく最後になろうとは。

私が26歳の時、大和郡山で初めて出会い、31年後の大和郡山で最後にお目にかかつてから3年後、2016年の七夕の日に、永さんは昌子夫人のもとに旅立たれた。享年八十三。合掌。

永さんとのお別れから7年、その間に新型ウイルスが跋扈し、さらには国と国との戦争まで始まってしまった。この困難な時代、永さんなら、どのようなメッセージを発せられるだろう。

2011年に起こった東日本大震災のあと、永さんは車椅子で現地に赴き、被災地の方々を励まされた。行かずにはおられなかったのだろう。永さんを慕う高石ともやさんも、最愛の奥様を亡くして初七日もすまないうちに、震災直後の被災地でコンサートを開かれた。家も家族もなくなった方から「あなたも大変だろうけど、がんばってね」と激励されたという。どんなに苦しい時でも人を応援できる力が残されている。この激励の声を引き出すことができた喜びで、高石さんは心よりほっとされた。

先に触れた2012年のまっぼつくり30周年のとき、開口一番永さんがおっしゃった言葉は「君もお母さんを亡くして辛いね。僕もね…」と夫人を亡くした悲しみを語られた。自分を投げ出すようにして、自分の悲しみをさらけだしてでも、

辛い目にあっている人の傍に寄り添う。私は思わず、子どものように永さんに抱きついて、声を上げて泣き出してしまった。そのときの永さんの小さくなられた、骨ばったお身体、そんなお姿になられても応援に駆けつけてくださったことへの感謝は到底言葉にはならない。

＋＋＋＋＋

悲しい戦争の報道に接するたび、永さんがご存命なら、どうされるだろうかと思ってしまう。車椅子で戦地に駆けつけ、全力を振り絞って車椅子から立ち上がり、慈愛の極まった憤怒の形相で、滔々とお話しになることだろう、ご自身が味わった悲惨な戦争体験を、両方の立場の人たちが、聞く耳を持つまで、お止めになることはないだろう。

いやいや、そんな想像のように書く必要はないかもしれない。みんな、永さんを覚えているのだから。永さんの歌は今も歌い続けられ、本も読まれ続けている。

永さんの歌が人々に口ずさまれ、その歌が人を励まし、勇気づけ、そして心を癒やしてくれるかぎり、永さんの「いのち」は亡くならない。迦陵頻伽の美しい声が永遠であるように。

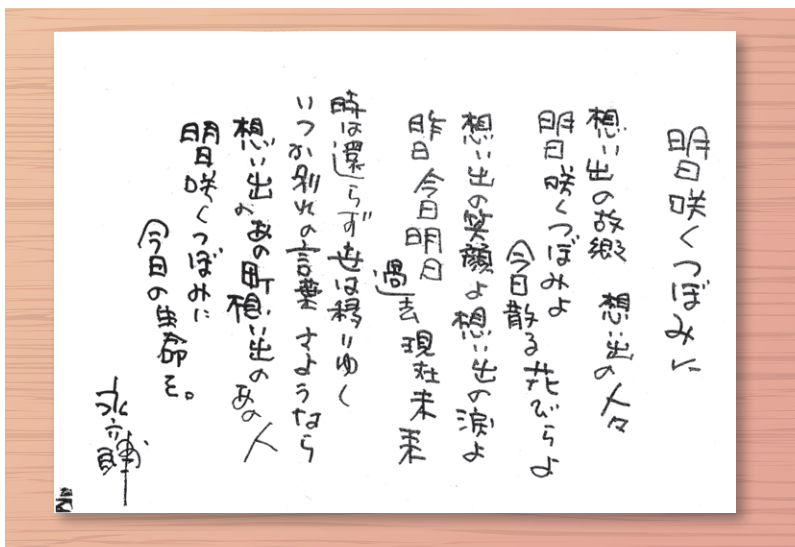
そう、私にもできることはある。それは永さんの歌を歌い継ぐことだ。

＋＋＋＋＋

永さんの83年の生涯で、どれだけたくさんの人との出会いと別れがあったかは、想像もつかない。そんな永さんの人生の

一コマの、そのまたほんの片隅にでも、居させてもらえたことを心から幸せだと思う。そして、その程度の私なのに、まだまだ永さんについてお話ししたいことがある。今回は、いつも以上にとりよめの内容になってしまった。次回は、私の「いのち」についての師匠であり、大恩人である永六輔さんのことを、私が知っている限り、きちんとお伝えしたいと思う。例えば「上を向いて歩こう」についてお聞きした、子どものころの思い出なども。

(以下、次回へ続く)



明日咲くつぼみに (1996年)

## 「いのち」の「さよなら」

永六輔さんへの思いがとりよめなくなってしまった事情を書かせていただく。

どちらの原稿も、2023年のお正月に書いているが、昨年の暮れ、とても悲しい経験をした。

＋＋＋＋＋

クリスマスの日の夜遅く、相棒のルビーを亡くしたのである。

亡くなったのは、キャバリア・キングチャールズ・スパニェルのルビー。垂れた大きな耳と、まん丸お目々の可愛い「わんちゃん」。母亡き後の相棒とも思っていた愛犬である。私と暮らしてはじめて11年。人であれば60歳になっていたから、心臓は肥大気味で股関節も自由ではなかったが、あまりに突然な死の原因は、心臓発作であったようだ。

＋＋＋＋＋

2011年の夏、小学一年生のころから二人きりで暮らしていた母が92歳で他界した。ルビーが来たのは、その9か月後。それ以来、ずっと一人きりになった寂しさに寄り添ってくれた。風邪で高熱を出した夜中には、母の仏壇の前に座り、祈るように見つめ続けていく翌日には平熱に。ルビーは母代わりの存在でもあったのだ。

事務所とスタジオを兼ねる我が家には人がたくさん出入りする。私がお迎えできないときは、代わってルビーが応対してくれた。一階のプライベート空間にお招きする親しい方々の中に、膝や足腰に痛みを持つ人がいる。ルビーは、その箇所に限って、ペロペロなめた。痛みが和らぎますようにと祈るように。痛いの痛いの飛んでいけ〜とおまじないでもするように。

＋＋＋＋＋

私とルビーは一緒に眠り、家にいるときはずっと一緒に生活をした。そのルビーを、クリスマスの夜に、私は亡くしてしまったのだ。突然の不幸に動揺したのだろう、深夜であることも忘れて、私の主治医である松尾宏先生に電話をしてみました。先生はお孫さん(生次君)の運転ですぐさま駆けつけてくださり、ルビーを診て死を告げてくださいました。生次君は静かにずっとお経を唱え続けていてくれた。

いつものベッドで、いつものように、安らかに眠るルビーと一晩過ごし、泣き明かした。朝一番に、母のお参りを普段からしてもらっている浄教寺の島田春樹住職に連絡を入れ、事の次第を告げた。

午前中は、合唱団の指導に集中した。今回の指導は、合唱団という家族のような存在の方々と、ルビーも日頃から可愛がってもらっていた皆さまなので、すべてを打ち明けた。薬師寺さん(まほろば会館)への奉納曲の練習は、いつも以上に熱のこもったものとなった。薬師寺さんでの平和祈願の合唱が、正月5日に控えていたのだ。

午後からはお通夜の準備。ことのほかルビーを可愛がってくださいました数人の方々にお参りいただいた。ルビーが大好きだった島田住職は、早い時間から枕経を唱え、夜は通夜をしてくださいました。

＋＋＋＋＋

翌日、2022年最後の合唱団の練習。ルビーのお葬式をお願いした浄教寺さんでのコルビュアランドの指導だった。

思えば、11年前の突然の母との別れの時も、その翌日に西大寺の興正殿での歌の指導が入っていた。母のことは隠して、中国・韓国・日本の若者にそれぞれの国の歌を指導した。母への思いは、歌の力にのり移ったように、無事大役を果たすことができた。

私は浄教寺さんの本堂の阿弥陀さまの御前で歌わせてもらったことが、何よりの救いであり、ルビーへの供養とさせていただけたと感謝した。

＋＋＋＋＋

